

「聞こえにくさと共に歩む」

～難聴ライフを明るく楽しく生きるコツ～



所 智子 氏

1月11日(日)10時～11時30分、赤羽文化センター第1視聴覚室において、所智子氏をお招きし、「聞こえにくさと共に歩む～難聴ライフを明るく生きるコツ～」と題して、ご講演いただきました。会員32名、非会員72名、合わせて104名の方にご来場いただきました。

★自己紹介★

東京都北区出身。3歳の時、麻疹に罹り、高熱で難聴に。手話を始めたのは13年前。現在はNHKワンポイント手話に出演、NHK文化センターで手話講座を担当。本業は、日本社会事業大学の障害学生支援室のコーディネーター。仕事の内容は情報保障の手配、学生面談・相談、教職員への理解啓発など。

1・生い立ちと聞こえにくさとの歩み…初めて困ったと感じたのは幼稚園の時。出席確認で返事ができない、歌がうたえなかった。先生に叱られて「聞こえ

ないことは悪いこと」と思い込み、わかったふりをするようになった。親が気づいてくれたのは小2の頃。補聴器を使用して一般の学校に通った。補聴器は雑音ばかり拾ってよく聞こえないうえに、皆の視線が気になり、自分を「みにくいアヒルの子」のように感じていた。聞えないことは深いコンプレックスとなって「聞こえにくい」ことをなかなか開示できなかった。なぜ、隠し続けたかということ「その場の空気を壊したくない」「相手に気を使わせたくない」「開示しても耳が治るわけではない」「相談できる人がいなかった」から。

2・中途失聴・難聴者のコミュニケーション…転機は友人に勧められて通うようになった手話講習会。そこには自分と同じように聞こえにくさを抱えた仲間がいた。わかったふりをしなくてもよい、何度聞き返しても叱られない、オアシスのような場だった。手話を学ぶと、聞き取れなかった言葉が目で見えるので、初めて「コミュニケーションって楽しい」と感じた。自分の聞こえ方は言葉が完全に聞き取れるわけではなく「文字化け」のように抜け落ちる。しかし手話があると、その抜けた部分を補ってくれるので、あたかも聞こえているかのように会話ができる。そもそもコミュニケーションとは、単なる情報のやり取りではなく、相手の反応をみて無意識に「自分はここにいていい」と感じられること。会話に入れない状況が続くと、「自分はいなくてもいいのでは」と存在を否定された気持ちになる。コミュニケーションは、社会生活を営む上で必要不可欠なものであるとともに、単なる情報伝達にとどまらず、人間の尊厳にも深く関わる。

3・難聴ライフを明るく生きる3つのコツ…①難聴を人生の中心にしない。聞こえにくさと格闘するのはやめて「自分はどう生きたいのか」を先に考えるようにしよう。

②仲間とつながり、心をひらく。1人でも多くの仲間とつながってほしい。

③小さな役割で誰かの力になる。誰かの力になれたと感じると自分の心も明るくなる。できる範囲の小さなことでいいから、誰かの「あかり」になってほしい。

